

## *Breakfast at Tiffany's*が描く1950年代

### The 1950s in *Breakfast at Tiffany's*

池田幸恵

#### 序論

1950年代のアメリカは黄金時代とよく言われている。そう言われる理由の一つは、アメリカ経済が繁栄を極めたことにある。経済繁栄の要因は、まず政府の財政支出が増大したことである。第二次大戦中、政府の財政支出が続き、戦後も冷戦体制により国防費は減ることがなく、産業界を潤したのである。次に個人消費の増加がある。人々は戦時中の軍需景気による貯蓄を、戦後一挙に消費しだしたのである。このような要因によってアメリカ経済は繁栄し、終戦から1960年までのGNPは2.5倍増加し、失業率は5%以下であった。<sup>1</sup>またこの経済繁栄は一部の上層階級へだけ潤いをもたらしたのではなく、中産階級や労働者層の所得を大きく引き上げたのだった。

黄金時代と言われるもう一つの理由は、アメリカが世界の超大国として指導的立場に立ったことである。核兵器保有による軍事的優位と豊かな経済力により、パクス・アメリカーナとよばれるアメリカを中心とした支配体制を作り上げたのである。このようにして、確かに1950年代のアメリカは黄金時代と呼ぶに相応しい状態であった。

しかし1950年代には明るい面以外も存在したのである。それは社会の保守化である。戦後の社会では、伝統的な価値観や制度が強調され、アメリカ的ではないと異端視されたものは排除された。具体的には、共産主義やリベラリズムが排除対象として攻撃された。ハリウッドの映画界を攻撃対象に「赤狩り」旋風が巻き起こり、またジョーゼ

フ・マッカシー議員による、体制にそぐわない人々を共産黨員だと糾弾する反共活動が行われた。

また、人々の生活は画一化されるようになった。経済繁栄の好景気の中で、人々は安価に住宅、自動車、家電製品を手に入れることができるようになった。そして人々はアメリカの豊かさとは、そのような物にかこまれた暮らしだと考えるようになり、みんなが同じ生活を目指すようになった。郊外住宅地では、似たような家に住む、似たような構成の家族が、似たような暮らしをするという生活の画一化がおこったのである。

このように1950年代のアメリカには、異端を排除する風潮や、周りの人々と同じでいよう、多数派に従おうとする順応主義が起こっていたのである。経済繁栄、超大国という輝かしい時代の中で起こっていた順応主義。その順応主義とはいったい何だったのだろうか。そのことを1958年に出版された、Truman Capoteの*Breakfast at Tiffany's*を通して考えてみたい。*Breakfast at Tiffany's*という作品には順応主義がどのように表現されているかを考察することにより、1950年代のアメリカの側面について考えてみたい。

#### 第1章 不可解な描写

*Breakfast at Tiffany's*の物語は、語り手がホリー・ゴライトリー (Holy Golightly) という少女について思い返すという回想形式で成り立っている。そのため、この物語内には現在と過去という二つの時間が存在する。物語における現在とは1957年である。この事は、語り手が“in a

downpour of October rain” (4)に、ホリーの友人であるジョー・ベル (Joe Bell) に写真を見にくるよう誘われ、その写真の裏には“Wood Carving, S Tribe, Tocoocul, East Anglia, Christmas Day, 1956.” (7)と書かれていたことから知ることができる。そして、この物語で回想している過去は1943年から1944年にかけてである。この事は第二次大戦中の話であり、“That Monday in October, 1943.” (53)という記述から明らかである。このように物語における時間は具体的に記述されており、読者も当然それを意識することができるようになっていく。

物語における現在と過去の時間がはっきりと明示されているということ踏まえることで、この物語にはある不可解な描写が存在することに気づく。それは次の描写である。

“[...] I know this idiot girl who keeps telling me I [Holly] ought to go to a headshrinker; she says I have a father complex. [...]” (19)

“[...] Benny spent maybe thousands sending her [Holly] to head-shrinkers. Even the famous one, the only speak German, boy, did he throw in the towel. [...]” (30)

不可解なのはheadshrinkerという言葉が使われていることである。このセリフが発せられたのは、どちらも過去の1943年においてである。*The Dictionary Contemporary Slang*によると“headshrinker”という言葉は以下のように説明されている。

A psychiatrist, psychoanalyst. A jocular term of the 1950s originating in the United State and reflecting the mild contempt, tinged with fear, felt towards the practitioners of these professions.

headshrinkerという言葉は1950年代に使われ始めたのである。その言葉がどうして1943年に使われているのだろうか。1950年代に使われだした言葉が1943年において使われていたという理由で、この二つの描写は非常に不可解なのである。

そこでこの不可解さを解決するために考えられるのは、この描写は1943年に実際に話されたセリフを回想し再現したのではなく、意図的に後から加えられたのではないかということである。

このことは物語の構造によって裏打ちされる。この物語は名前の無い「私」という語り手による一人称の語りである。話はすべて語り手の視点から語られている。さらに重要なのは、この語り手が作家であるということである。

It never occurred to me in those days to write about Holly Golightly, and probably it would not now except for a conversation I had with Joe Bell that set the whole memory of her in motion again. (3)

作家である語り手自身がこの物語を書いているという構造になっているのである。そのため、語り手はこの物語を、過去に手を加え再現することが可能な立場にある。つまり、語り手であれば意図的にheadshrinkerという言葉を使うことができるのである。

さらに語り手が意図的にheadshrinkerという言葉を使用したと考えられる理由は、物語内の時間である。語り手がホリーを思い返し、書いているのは1957年である。1957年であれば、当然語り手はheadshrinkerという言葉を知っているはずである。語り手であればこの言葉を意図的に使うことが可能なのである。

このように語り手はheadshrinkerという言葉が使われていた時代に生きていて、物語を操れる立場にいた。この事から、上記の二つの描写は1943年に実際に言われたセリフを回想して再現したのではなく、1957年に語り手によって意図的に加えられたセリフだと考えられる。

それでは、どうして語り手は意図的に上記の描写を加えたのだろうか。語り手のその意図とは何だったのだろうか。そのことを考えるために、次章でアメリカにおける1950年代のheadshrinker、つまり精神医学についての状況を見てみたい。

## 第2章 1950年代の精神医学

アメリカでは1950年代、精神医学において非常に精神分析が繁栄していた。しかし、そもそも精神分析とは単なる神経症の一学説であり、精神医学の外から始まったのである。それが1930年代後半から精神分析は精神医学とつながりを持ち始めた。精神分析家が精神科医としての資格を取り始め、さらに精神医学の教育課程に精神分析の学説を導入するよう促がしたのである。その結果として、精神分析家は精神科医になり、精神科医は精神分析を身につけ、1940年代には精神分析は精神医学と結びついたのである。

さらに1950年代には精神分析は精神医学と結びつくだけでなく、精神医学のメインストリームになったのである。精神分析が精神医学の優勢に立つことができたのは、精神分析が開業医になる道を切り開いたからである。それまで、ほとんどの精神科医は国立病院で勤務医として働いていた。しかし精神分析は治療法に一对一の個人療法を使用したため、開業することが可能になったのである。精神分析家になり開業医となるか、精神科医として国立病院の勤務医であるかということは、社会的地位の違いを生み出した。例えば、1954年開業医の平均収入は22,000ドルだったのに対し、国立病院の精神科医の平均収入は9,000ドルであった。精神分析家医は一流の専門家と見なされた一方で、精神分析医ではない精神科医は二流の専門家と考えられていたのである。<sup>2</sup>このように、精神分析は開業を可能にし、社会的地位を上げることで、精神医学におけるメインストリームになったのである。

さらに、精神分析は精神医学界のなかで繁栄しただけでなく、一般の人々の間でも流行した。精神分析が人々の間で人気になったのは、精神疾患に対するイメージが変わったからである。第二次大戦中そして戦後、戦争神経症になる兵士の数が急増した。そして、新聞や雑誌などがその戦争神経症にかかった兵士について報道したのだが、これらの記事の中で、戦争神経症の兵士はヒーロー

として扱われたのである。記事の中では、どんなに強く勇ましい兵士でも厳しい戦場では戦争神経症になる可能性があり、さらに戦争神経症にかかる兵士は戦争の犠牲者であり、神経を病んだ狂人ではないと伝えられたのである。このことが大衆の精神疾患に対するイメージを変えた。それまでは、精神疾患は狂った人がかかる病気であり、ごく一部の人だけがかかるのだと思われていたのである。しかし戦争神経症の兵士に対する報道によって、精神疾患にかかっている人は狂っているわけではなく、また誰でも精神疾患になる可能性があるのだと、人々は認識するようになったのである。このようにして、精神疾患に対する恐れを含んだイメージが変わったことにより、大衆の間で精神分析が流行するようになったのである。

さらに、精神分析自体に対するイメージが変わったことも、人々の間での精神分析の流行を促がした。戦争神経症の兵士が増えた際、軍部は精神分析が神経症を治療することが得意だったため、戦争神経症の治療に精神分析を採用したのである。そして精神分析家は軍部の期待に答え、戦争神経症の兵士の治療に成功したのである。精神分析が軍部に貢献したということは、大衆に衝撃を与えた。それまでも、アメリカには精神分析は流入されていたが、人々は精神分析に対し懐疑的な気持ちを持っていたのである。しかし、精神分析が戦争神経症を治療したということによって、人々は精神分析に対して信頼感を持つようになった。この精神分析に対するイメージの変化もまた、精神分析が大衆の間で流行する要因となったのであった。

では、1950年代のアメリカで、大衆の間に流行した精神分析とはどのようなものだったのだろうか。精神分析が、それまでの精神医学と異なる点は、精神疾患を引き起こす原因をどのようなものとするかということである。それまでの精神医学では精神疾患の原因は遺伝や身体的問題と考えられていたが、精神分析は精神疾患の原因を人間の心に求めたのである。初期の精神分析では、幼少期や過去における性的体験や感情的な異常体験が無意識の世界に抑圧され、それによって葛藤が

生まれ、その葛藤が精神疾患を引き起こすと考えられていた。精神疾患は心因によって起こると考えられていたのである。さらに、その考え方はアメリカで発展した新フロイト主義者 (neo-Freudian) によって環境因という考え方に発展した。環境因とは、家庭や職場などの社会における人間関係を重要視し、人間関係のひずみから葛藤や要求不満が生じ、そのことが精神疾患を引き起こす原因になるという考えである。精神分析においては、精神疾患とは人間が社会や生活環境への適応に失敗することによって起こると考えられたのである。つまり、社会や生活に適応できない不適応の問題と精神疾患は結びつけられて考えられていたのである。

精神分析の治療法には、分析家と患者が一对一で行う自由連想法という療法が取られた。自由連想法とは、患者に思い浮かぶことを自由に語らせて、患者のもつ葛藤や要求不満とは何かを分析家が見いだそうとし、そして患者は自分の中の葛藤や問題を直視し、自己を洞察することによって解決へと導いていくという治療法である。<sup>3</sup>精神分析の療法では、精神疾患を引き起こした原因である社会との不適応の問題を患者が向き合い考えることで治癒へと向かうと考えている。つまり不適応は患者側の問題であり、患者が社会に適応しなくてはならないと考えられていたのである。

以上が1950年代のアメリカ精神医学の状況である。1950年代、大衆の間で流行していた精神分析は不適応と密接に結び付いていたのであった。

### 第3章 ホリーについて書くという事

そもそも、どうして語り手はホリーについて書くのだろうか。過去には彼は確かにホリーに以下のように愛情をもっていた。

Suddenly, watching the tangled colors of Holly's hair flash in the red-yellow leaf light, I loved her enough to forget myself, my self-pitying despair, and be content that something she thought happy was going to happen. (87)

しかし1957年においては、彼はホリーに愛情どころか関心すらもっていないのである。

It never occurred to me in those days to write about Holly Golightly, and probably it would not now except for a conversation I had with Joe Bell that set the whole memory of her in motion again. (3)

この描写が意味するのは、語り手がジョー・ベルと話すまではホリーについて忘れていたということである。確かに、語り手がホリーに最後に会ってから13年が経っているのだから、長い時間のせいでホリーを忘れてしまっても当然かもしれない。しかしホリーのもう一人の友人であるジョー・ベルは、

“You take a man that likes to walk, a man like me, a man's been walking in the streets going on ten or twelve years, and all those years he's got his eye out for one person, [...] I see pieces of her all the time, a flat little bottom, any skinny girl that walks fast and straight—.” (9)

彼は長い間もずっとホリーを思っていた。もし語り手も過去と同じ愛情をもっていればホリーとの思い出を忘れることはなかったはずなのである。また語り手はホリーの木彫像が写っている写真を見ても、ジョー・ベルがあれこれホリーについて考えているのとは対照的に、興味を示さず無関心なままなのである。それなのに、現在語り手はホリーについて書くのである。

このことから、語り手は単に懐かしさや愛情からホリーとの思い出を書いているのではなく、ホリーを描くことを通して何か別のことを描こうとしているのではないかと考えられる。この物語は、語り手のホリーについての個人的な物語を超えたものなのではないだろうか。

語り手が書こうとしたホリーとはどのような人物なのだろうか。まず挙げられるのは、同時に魅力にもなっているのだがホリーは社会規範や一般常識とは合わない人物である。ホリーはハリウッドにいた時、ハリウッド・スターになれたかもしれない機会があったのにも関わらず、自らその機



会を捨てて、ニューヨークで男からのチップで暮らすという生活を選んだ。また犯罪者であるサリー・トマト (Sally Tomato) について、サリーが友人であるという理由から、警察からの証言要請を平気で拒む。ホリーは自分のルールで行動するのである。

“[...]Honest is more what I mean. Not law-type honest—I'd rob a grave, I'd steal two-bits off a dead man's eyes if I thought it would contribute to the day's enjoyment—but unto-thyself-type honest. [...]” (83)

ホリーは自分自身に誠実であるためには、法律を犯すことも気にしてないのである。

次に、ホリーはどこにも帰属することができない人物である。ホリーはいつか自分が落ち着ける場所を見つけ、そこに帰属することを望んでいる。しかしホリーはどこにも帰属できる場所を見つけれないのである。まずホリーは子供の時両親を亡くし、孤児院へ送られた。そしてそこを逃げ出し、医者ゴライトリー (Doc Golightly) の元で暮らすようになった。しかしその後、ゴライトリーの家を飛び出しハリウッドへ行った。ハリウッドで数年を過ごした後今度はニューヨークへと行き、そしてニューヨークからブラジルへと旅立ち、アルゼンチンへ行き、現在はアフリカにいるらしいのである。このようにホリーは帰属できる場所を探し求めながらも、どこにも帰属できない人物なのである。

このような特徴を持つホリーという人物を、語り手は現在時間の1957年に描いたわけだが、語り手が読者として想定したであろう1957年の読者がホリーを読むとすると、読者は精神的な見方でホリーを見てしまうのではないだろうか。ホリーが社会規範に合わないことや、どこにも帰属できないことは、ホリーが社会に適応できていないということである。そうすると、読者はホリーの不適応を精神疾患と結びつけて考えるだろう。この時代の読者はホリーが精神疾患を患っていると考えたかもしれないのである。

しかし第一章で提示したheadshrinkerの描写が存在することで、ホリーの不適応を精神疾患と

結びつける読みが変わるのである。ここでもう一度それらの描写を引用してみる。

“[...] I [Holly] know this idiot girl who keeps telling me I [Holly] ought to go to a headshrinker; she says I have a father complex. [...]” (19)

“[...] Benny spent maybe thousands sending her [Holly] to headshrinkers. Even the famous one, the only speak German, boy, did he throw in the towel. [...]” (30)

上の引用は、ホリーを精神分析家に診てもらわなければならないと考えるのはまぬけなことだということを意味しており、下の引用は有名な分析家でさえホリーには全く効果が無いということの意味している。どちらの引用も精神分析の有効性を示すのではなく、精神分析がホリーには何ら意味のない無力なものである、と否定的に描かれている。そのため、この描写を読むことで読者は、ホリーを精神疾患と結びつけて考えるのは愚かなことであり、意味の無いことだと判断し、ホリーを精神的な見方から離れて読むことができるのである。

以上のことから、語り手がheadshrinkerの描写を意図的に加えたその意図とは、語り手が読者として想定していた当時の読者に、ホリーの社会との不適応の問題を、精神疾患と結びつけて考えて欲しくなかったためではなかったかと考えられるのである。

ではどうして語り手は、ホリーを精神疾患とは見なして欲しくなかったのだろうか。もしホリーが精神疾患として読まれてしまえば、ホリーが社会との適応に失敗したのはホリー自身のせいであり、解決するためにはホリーが社会に適応しなければならぬということになってしまう。しかし語り手が、ホリーを精神疾患ではないと描くことで、ホリーの不適応の問題をホリーという個人に原因を求めるのではなく、不適応を招く社会にも原因があるのだと、適応を強いる社会に読者の目を向けさせることができる。

語り手はホリーを描くことを通して、不適応の問題は個人のせいだけではなく、社会側にも原因

があるということを描きたかったのである。そして、語り手のこのような姿勢は、語り手自身の作家としての現状に重なるのである。

#### 第4章 作家としての語り手

語り手が作家としてどのような状況にあったかを考えてみたい。1943年において、語り手は作家志望の青年だった。彼は作家になることを強く望んでいた。

It [a letter] was from a small university review to whom I'd sent a story. They liked it ; and, though I must understand they could not afford to pay, they intended to publish. Publish: that meant *print*. Dizzy with excitement is no mere phrase. (51-52)  
語り手は原稿料をもらえないにも関わらず、ただ雑誌に掲載されるということだけでとても喜んでいました。

このように彼は作家になることを強く望んでいるが、作家になるためには、どんなことでもしようとは思っていない。彼がなりたいのは、あくまでシリアスな作家である。

“O.J.Berman's in town, and listen, I gave him your story in the magazine. He was quite impressed. He thinks maybe you're worth helping. But he says you're on the wrong track. Negroes and children: who cares?” (61-62)

このようにホリーに言われるが、ハリウwoodsの代理人のバーマンが自分の作品に興味を持ってくれたことに喜びは無く、助言通り売れる題材に変える気もない。そして、そのことで語り手はホリーと口論になる。

“Don't you want to make money?” “I haven't planned that far.” (62)

と語り手は作家として売れることを望んではいないとはっきりと述べている。このように1943年の語り手はシリアスな作家になることを希望し、売れる題材を書くことや、作家で金を得ることに全く関心を払っていなかったのである。

しかし語り手が生きている1957年現在の出版界の状況はそのような作家としての姿勢を許さない状況であった。第二次大戦後、若い復員兵士の多くが政府からの援助を受けて大学へ進学し、また戦後のベビーブームにより就学人口が増加した。就学人口の増加により、教科書出版を中心に出版規模が拡大し、出版社はそのための莫大な資金が必要になった。そのため出版社は株を公開する必要に迫られ、ウォール街の証券会社も出版社の急成長を高く評価し、株の公開に援助や支援を与えたのである。また、他社との合併・買収も行われはじめた。この合併・吸収では出版社同士が結びつくだけでなく、コンピューターシステム産業などの異業種産業が出版社の合併・吸収に乗り出すコングロマリットが行われたのである。

その結果、出版界ではビジネス精神が重視されるようになった。株を公開したことにより、株価や株主の意向を重視し、短期間で利益を上げるよう、確実に売れると判断される作品が出版されるようになった。コングロマリットにより、出版社の経営は出版にたずさわらない経営者の手に渡った。そのような経営者は出版社にコンピューター化された経営や管理部門を作り、出版業を能率化させていった。作品は売れるかどうかを調査され、出版されるようになった。

さらにペーパーバックの飛躍も出版界のビジネス精神を強化していった。1939年にペーパーバック・シリーズの「ポケット・ブック」が出版されて以来、ペーパーバックは売上を伸ばしていった。1951年には一般書籍売上部数に対する比率はハードカバー32%に対し、ペーパーバック57%とペーパーバックの方が優勢になったのである。<sup>4</sup>そして、ペーパーバック出版社が出版市場をコントロールするようになった。ペーパーバック出版は、チェーンストアを通して販売し、売上を重視した。ベストセラーではない売上の悪いものはすぐに次の本と代えて回転率を上げていくという方法を取り、出版界に売上を重視する考えをもたらし、ビジネス精神を促進したのである。以上のように、1950年代の出版界はビジネス精神に支配され、売れることが重視されていたのである。

そのような出版界の状況の中で、語り手はこれまでのように売れることに関心を持たず、シリアスな作家としていることは許されなかつただろう。当然、出版社からは売れる作品を書くよう強い圧力がかかっていたのではないだろうか。語り手にはシリアスな作家でいたい自分自身の気持ちと、売上を重視する出版界の間での葛藤を抱え、ビジネス精神あふれる出版界に適應することに困難を感じていたのではないだろうか。

そのため語り手は、ホリーを描くことを通して不適應の問題について描いたのではないだろうか。作家という個人として、出版社という社会に適應できない現状があつたからこそ、個人と社会の間の軋轢は、個人問題の不適應や個人が社会に適應しなくてはならないということではなく、適應を強いる社会にも問題があるのではないかということを書いたかつたのではないだろうか。

## 結論

これまで*Breakfast at Tiffany's*はホリーの物語として読まれてきた。ホリーの持つ自由や孤独に魅力を感じてきた読者も大勢いるだろう。しかし、この小説はホリーだけの物語ではなく、語り手の物語でもあるのではないだろうか。語り手は物語を進める進行役の存在として捉えられてきた。実際、物語上ではほとんど語り手について記述されることはなく、読者が得られる語り手の情報は少ない。そのような語り手の少ない語られ方の中で、奇妙なほど多く語られているのが語り手の作家としての面である。どのような作家になりたいのか、どれほど強く作家になりたいと望んでいるのか、どのような小説を書くのか等、語り手の作家としての面だけは豊富に語られている。単なる物語進行役としては不必要な程に作家としての語り手が語られているのである。これは、ホリーを中心として読めば不必要に思われるが、語り手を中心として読めば、作家としての語り手について語るのは必要なことだつたということではないだろうか。*Breakfast at Tiffany's*は語り手の物語でもあつたのである。そして作家としての語り手

が、適應を強いる出版界やアメリカ社会への疑問として、社会に画一化されない自由な存在としてホリーを描こうとしたのである。

しかし、ホリーの自由さをそのまま描くだけでは1950年代の枠組みの中では、精神分析的な見方によってホリーの生き方は精神疾患の問題とされてしまう。そのため語り手は、不可解になってしまふにもかかわらず“headshrinker”という言葉を使用し、読者がホリーを精神分析的に捉えられないようにし、適應を強いるアメリカ社会に目を向けさせようとした。

そして、1950年代に人々の間で精神分析が流行したのは、社会への不適應の問題を吸収する装置として機能していたからではないだろうか。適應を強いる社会に対して、当然全ての人が適應できるわけではない。そのような適應できない人に精神疾患というラベルを貼ることで、順應を強いる社会への疑問を回避することができ、社会への不適應を個人の問題とすることが可能であつた。

語り手の物語としての*Breakfast at Tiffany's*はホリーの自由や孤独といった問題以外の面を示してくれる。この小説から、個人の社会への一方的な適應を強いた1950年代のアメリカ社会を見ることが出来る。

## 後註

1. 経済状況については、島田の「第9章 第二次大戦後のアメリカ社会」を参照した。
2. 1950年代の精神医学については以下を参照した。  
Hale, Jr.の*The Rise and Crisis of Psychoanalysis in the United States*  
ショーターの『精神医学の歴史』  
ピシヨーの『精神医学の二十世紀』
3. 精神分析とその治療法については、加藤の『精神医学』を参照した。
4. 出版界については、金平の『世界の出版流通』を参照した。

## 引用文献

- Capote, Truman. *Breakfast at Tiffany's*. New York: Vintage Books, 1993.
- Hale, Jr., Nathan G. *The Rise and Crisis of Psychoanalysis in the United States: Freud and the Americans, 1917-1985*. New York: Oxford UP, 1995.
- 金平聖之助. 『世界の出版流通』. 東京: サイマル出版界, 1970.
- 加藤伸勝. 『精神医学』. 京都: 金芳堂, 1971.
- 島田真杉. 「第9章 第二次世界大戦後のアメリカ社会」. 『アメリカ合衆国の歴史』. 野村達郎編. 京都: ミネルヴァ書房, 1998. 231-32.
- ピシヨー, ピエール. 『精神医学の二十世紀』. 帚木蓬生, 大西守訳. 東京: 新潮社, 1999. Trans. of *Un Siecle Depsychiatrie*.
- ショーター, エドワード. 『精神医学の歴史: 隔離の時代から薬物治療の時代まで』. 木村定訳. 東京: 青土社, 1999. Trans. of *A History of Psychiatry: From the Era of the Asylum to the Age of Prozac*.
- Yhorne, Tony. *The Dictionary of Contemporary Slang*. New York: Pantheon Book, 1990.